

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目

A study of work-home balance among workers in Romania  
(ルーマニアにおける労働者のワークホームバランスについての検討)

氏 名

MUSCALU BRATESCU Ioana Cristina

## 論 文 内 容 の 要 旨

### 本研究の問題と目的

仕事と家庭とのバランスにより、仕事の満足と共に家庭の満足やウェルビーイングが高まることが複数の先行研究に示されている（例：Greenhaus, Collins, & Shaw, 2003; Grzywacz, & Bass, 2003）。しかしながら、ワークホームバランスは心理社会的なテーマであることから、国の経済状況、雇用状況などの社会状況を受けざるを得ない。このことから、ワークホームバランスの効果については、それぞれの社会で実証的に検討される必要がある。ルーマニアにおいては労働者のワークホームバランスについての研究がまだ少なく、ルーマニア人のワークホームバランスの知見が蓄積されていない。このため、本研究ではルーマニアにおける労働者のワークホームバランスの効果について検討した。

### 各章の内容

#### I 章 導入

ワークとホームのバランスのためには、個人背景要因（例：教育レベル、仕事の安定さ、勤続年数、婚姻）以外に、人の内的な資源が必要になると考えられる。定義によれば、ワークホームバランスは内的資源（例：認知、注意）と外的資源（例：時間）の組み合わせにより生み出される（Kreiner et. al Hollensbe, & Sheep, 2009）。本研究では、外的資源としてワークホームバランスに関する組織の支援ポリシー、職務自律性、および、内的資源としてワークホームバランスの満足度に影響を及ぼすと考えられるワークホームバランススキルとワークホーム調整戦略、認知的な再評価を検討する。加えて、本研究ではワークホームバランスにおける男女差についても検討する。

#### II 章 ワークホームバランス満足におけるワークホームバランススキルとワークホーム調整戦略の役割

本章では、ワークホームインタフェースに生じる否定的な感情がワークホームバランスにおける満足にどのように影響を持つのかを検討した。職場と家庭の境界に生じる否定的な感情はストレス要因としてワークホームバランス満足度に負の影響を持つが、この関係を緩和するコーピング要因の検討

が行われてきている。例を挙げれば、社会的な支援 (Valk & Srinivasan, 2011), 情緒的な独立 emotional detachment (Sonnetag, Kuttler, & Fritz, 2010), 自己効力感 (Basuil & Casper, 2012) などである。しかしながら、ワークホームバランススキルとワークホーム調整戦略に関する検討はまだあまり行われていない。英語で構成した質問紙をバックトランスレーション法によりルーマニア語に翻訳し、ルーマニアの労働者 311 人を対象として実施した。結果として、ワークホームインタフェースに生じる否定的な感情からワークホーム調整戦略への正のパスが見いだされ、さらにこの戦略が精神的不健康を高めた。また、否定的な感情からワークホームバランススキルへの負のパスが見いだされ、さらにスキルは精神的不健康を低めると同時に、ワークホームバランス満足度を上げるという結果が得られた。また、ワークホームバランススキルが低いときには、労働時間が長くなるとワークホームバランス満足度も低くなったが、逆に、高いスキルを持つと、労働時間が長くなってもワークホームバランス満足度は低くならないという結果が得られた。

### III 章 ルーマニアにおける労働時間、認知的な再評価、職務自律性とワークホームバランス満足度の関係

本章の目的は労働時間とメンタルヘルスおよびワークホームバランスとの関係を明らかにすることである。本稿では労働時間と休日労働時間を調べた。労働時間のみではなく、休日労働時間はメンタルヘルスに悪影響を与えることが明らかとなっている (Schlotz, Hellhammer, Schulz, & Stone, 2004)。労働時間の影響を調整するコーピングのひとつが職務自律性である。職務自律性により、ワークホームコンフリクトが低くなる (Eby et.al., 2005; Kossek, Lautsch & Eaton, 2006; Valcour, 2007)。もうひとつのコーピングが認知的な再評価である。認知的な再評価により、労働者の自己効力感が高くなり、ワークホームコンフリクトが低くなり、仕事の満足度が上がる (Zhao & Namasivayam, 2012)。II 章と同様の方法により検討を行った。その結果、労働時間とワークホームバランス満足度との関係において職務自律性の調整効果が見いだされた。また、休日労働時間とワークホームバランス満足度との関係においても職務自律性の調整効果が見いだされた。最後に、休日労働時間と結婚満足度との関係においては認知的な再評価の調整効果が見いだされた。示された結果から、もちろん過度な労働時間は改善される必要があるものの、その過度な労働時間においても、職務自律性および認知的な再評価が満足度を下げないために有効であることが示された。

### IV 章 ルーマニアのワークホームバランスにおける男女差の問題

本章の目的は、ルーマニア労働者のワークホームバランスにおける性差を検討することである。先行研究によれば、働く女性の仕事と家庭の両立のために役立つのが職場の支援である (Erdwins, Buffardi, Casper, & O'Brien, 2001)。II 章、III 章と同じ方法により検討を行った。性差を検討したところ、教育レベル、労働時間、職務自律性は男性が高く、家庭からの要求、家事自律性は女性のほうが高かった。男性の場合、職場の支援が低い場合、仕事の要求が高くなるとワークホームバランス満足度が低くなり、職場の支援が高い場合は、仕事の要求が高くなるとワークホームバランスの満足度が高くなるという結果が見いだされた。逆に、女性の場合は、職場の支援が低い場合、仕事の要求が高くなると家庭満足度が高くなり、職場の支援が高い場合は、仕事の要求が高くなる

と家庭満足度が低くなることを見いだされた。組織場面では職場の支援を進める際には、個々の労働者の支援のニーズに配慮すべきことが結論された。

## **V章 ワークホームの統合・分離戦略とケアのための労働者の内的な資源の入手：ロールバランスとポリシーの質的な検討**

本章の目的は質的な方法によってワークホームバランスの二つの戦略を検討することである。その戦略は、ワークホームの統合と分離である (Kreiner, Hollensbe and Sheep, 2009)。ワークホームの統合とは仕事と家庭との物理的・精神的境界をなくすことである。一方で、ワークホームの分離とは仕事と家庭の間に明らかに物理的・精神的な境界を置くことである。10人の労働者がインタビューに参加した。分析の結果、ワークホームの統合と分離の程度が、介護や子供のケア、教育方法などについての決定に影響を与えていることが明らかとなった。

## **VI章 全般的な議論**

以上の検討の結果から、今後の課題等について論じた。まず、個人労働者が日常生活のスケジュールにおいて、個人のワークホームバランススキルに応じて行動を決めることが必要である。次に、組織では、男女差をはじめとする個人差を知り、働く人の労働時間やニーズと家族などに配慮すべきである。最後に、研究者としては、さらにワークホームインタフェースの研究を進めていく必要がある。

## **本研究の特徴**

本稿は、ワークホームインタフェースの研究において、従来扱われてこなかったワークホームバランススキルについて検討したことが特徴的である。また、心理学的アプローチにより、ルーマニア人のワークホームバランスを検討したこと、さらに、量的なアプローチと質的なアプローチの2つのアプローチにより、ルーマニア労働者のワークホームバランスに関して理解を深めたことが特徴的であると考える。